

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：22501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22390425

研究課題名(和文)がん患者の主体性発揮を促進・活用する外来がん看護実践者の能力育成プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a program to bring up the outpatient nurses who can make use the independence of will of the outpatient with cancer in outpatient nursing

研究代表者

佐藤 まゆみ(Sato, Mayumi)

千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授

研究者番号：10251191

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,100,000円、(間接経費) 2,430,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、外来通院するがん患者の主体性を活かして外来看護を実践することができる外来看護師を育成するプログラムを開発することである。外来通院がん患者395名及びがん診療連携拠点病院の外来看護師598名を対象とした質問紙調査から、問題解決方法の獲得支援と療養姿勢の後押し、外来診察における医師からの情報獲得支援、外来における他職種連携による支援等、外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な5つの能力を明らかにした。この結果から、5つのサブプログラムから構成するプログラムを開発した。学習者はチェックリストで自己の実践力を評価し、必要なサブプログラムを選定し学習した後、実践力を再評価する。

研究成果の概要(英文)：A purpose of study is to develop a program to bring up the outpatient nurses who can make use the independence of will of the outpatient with cancer in outpatient nursing. Through two surveys, one is for 395 outpatients with cancer, the other is for 598 outpatient nurses of the cancer center, we determined five abilities that were necessary for that outpatient nursing. These abilities were ability to support the acquisition of the problem solving method and to support the feeling to confront a problem, ability to support the acquisition of information from the physician at the physician's consultation time, ability to cooperate with other professionals in an outpatient setting, and so on. Based on these results, we developed a program to consist of five subprograms. At first, the learner evaluates practice situation of the self with a checklist, and chooses a subprogram with the need to learn and learn it, and after learning, reevaluates the practice situation.

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：がん看護 外来看護 主体性 外来看護師 プログラム

1. 研究開始当初の背景

近年、外来に通院しながら治療継続や在宅療養を行うがん患者が急増し、これに伴い、外来がん看護の重要性が見直されている。筆者らは、“がん患者にとって最も重要なことは、自らが立ち上がり、がんを抱えても自分らしく生きることである”との考えに立ち、平成11年から10年間に亘って外来がん看護の質向上、即ち、外来通院がん患者のQOL向上のための研究に取り組んできた。

平成11～14年度科学研究費補助金では、外来看護師が多種多様な業務に忙殺され、外来看護独自の役割や機能を見いだせない状況をうけ、外来看護のあり方を明確に方向づける「外来通院するがん患者の主体的療養を支援するための外来看護モデル」を構築した。そして次に得た平成15～17年度科学研究費補助金を基に、研究者と外来看護スタッフ共同で、構築した外来看護モデルを大学病院食道胃腸外科外来において約1年間適用し、「外来通院するがん患者の主体的療養を支援するための外来看護モデル」を実証的に開発した。その後、平成18～20年度科学研究費補助金を得て、このモデルの最重要点である「主体的取り組みへの支援」をさらに明確にする研究に取り組み、外来通院がん患者の主体性を活かした外来看護を実践していると評価されている10名の外来看護師への面接調査を通して、主体的取り組みを支援する具体的な外来看護実践方法と支援を行うために必要な外来看護師の看護実践能力を明らかにした。

この研究の結果、外来通院がん患者の主体的取り組みを支援する看護実践のために必要な外来看護師の能力として、多様に生活する患者との関係を個別性重視で維持する能力、患者の主体性発揮を動機づける能力、患者の主体的能動

的行動を引き出す能力、外来で看護を行うための基礎実践能力、などが明らかになった。「がん対策基本法」の理念を実現するためには、療養主体としての患者の意思を尊重し、患者の主体性を活かして行う看護実践の開発は不可欠である。そして、この実践を的確に実施するためには、外来看護師の能力開発が不可欠である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、外来通院するがん患者の主体性を活かして外来看護を実践することができる外来看護師を育成するプログラムを開発することである。研究期間内に明らかにする内容は、以下の3点である。

(1) 外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な外来看護師の能力を、外来通院がん患者の視点から明らかにする。

(2) 外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な外来看護師の能力を、外来看護師自身の視点から明らかにする。

(3) 上記(1)(2)及び文献検討等により、外来通院するがん患者の主体性を活かして外来看護を実践することができる外来看護師を育成するプログラムを開発する。

3. 研究の方法

(1) 外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な外来看護師の能力の明確化：外来がん患者の視点からの調査

調査票の開発

調査票を開発するための以下の方法で聞き取り調査を行う。目的：外来通院がん患者ががんを抱えながらも自分らしく療養生活をおくるために、外来看護師にどのような関わりを求めているかを明らかにする。対象：外来通院経験のあるがん患者と家族。データ収集方法：研究者と関係のある患者会の代表者に研究協力を依頼し、同意が得られたら、

会に所属する者の中から対象の条件にあう者を 10 名程度選んでもらい、研究協力依頼書を配布してもらい、対象候補者から協力の意思を示す連絡用紙が研究者に返送されることによって協力の意思を確認する。患者会ごとにグループを編成し、がん罹患やがん治療によって生じた生活上の困難に自分らしく取り組む過程で、外来看護師にどのような関わりを求めるかについて、1 時間程度のグループインタビューを行う。

外来通院がん患者への質問紙調査

上記と文献検討によって作成した調査票を用いて、以下の方法で質問紙調査を行う。目的：外来通院がん患者ががんを抱えながらも自分らしく療養生活をおくるために、外来看護師に求める看護実践能力を明らかにする。対象：外来に通院するがん患者。データ収集方法：研究者と関係のある患者会の代表者に研究協力を依頼し、同意が得られた団体に調査票を郵送する。会に所属する者の中から対象の条件にあう者を 20 名程度選んでもらい、調査票を配布してもらい、調査票の個別返送によって研究協力の意思を確認する。

(2) 外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な外来看護師の能力の明確化：外来看護師の視点からの調査

調査票の開発

「がん患者」「外来」「外来看護師」「主体性」「セルフケア」「エンパワーメント」「看護相談」をキーワードに医学中央雑誌で検索（検索期間：2003 年～2012 年）を行い、外来通院がん患者の主体性を活かして行う外来看護実践の具体的内容が記述されている文献を選択する。これらの文献より抜き出した具体的看護実践方法と、外来通院がん患者を対象にした上記(1)の調査結果から、重複内容の整理及び文言の精選を経て調査票を作成する。

外来看護師への質問紙調査

上記で作成した調査票を用いて、以下の方法で質問紙調査を行う。目的：外来通院がん患者ががんを抱えながらも自分らしく療養生活をおくるために必要な看護実践能力を外来看護師の視点から明らかにする。対象：全国のがん診療連携拠点病院に勤務する外来看護師。データ収集方法：合計 150 施設のがん診療連携拠点病院の看護部門の長あてに研究協力を依頼し、同意が得られた施設に、調査票を郵送し配布を依頼する。調査票の個別返送によって研究協力の意思を確認する。

(3) 能力育成プログラムの開発

上記(1)(2)で明らかになった、外来通院がん患者ががんを抱えながらも自分らしく療養生活を送るために必要な外来看護師の看護実践能力を育成する方法を、文献検討及び必要時には有識者への相談を行うことによって明確にし、育成プログラムとして開発する。

4. 研究成果

(1) 外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な外来看護師の能力の明確化：外来がん患者の視点からの調査

調査票の開発

5 つの患者会の合計 42 名より協力が得られた。42 名の内訳は患者 32 名 (76.2%)、家族 8 名 (19.0%) であり、平均年齢は 62.9 歳であった。患者の病名は、血液がん 13 名 (31.0%)、乳がん 11 名 (26.2%) であった、がん罹患から現在までの期間は平均 6 年 6 か月であった。現在外来通院中の者は 35 名 (83.3%) で、通院頻度は、3 か月に 1 回が 9 名 (25.7%)、1 か月に 1 回 8 回 (22.9%) の順であった。グループインタビューの逐語録より、外来通院がん患者が自分らしく療養生活を送るために外来看護師に求める関わりは 92 抽出され、それらは以下の 22 にまとめられた。1. 患者に関心を向け状態を気遣って声

をかける。2. 患者の家族についても気遣う。3. 患者と話す時間を看護師自ら作る。4. 患者のプライバシーを守る。5. 話しやすい落ち着いた雰囲気に関わる。6. 専門職者であってもひとりの生活者として患者と関わる。7. 社会的に常識のある態度に関わる。8. 患者の体験を同じようには理解できないことを知って関わる。9. がん治療について豊富な知識を持って関わる。10. 患者の病状や生活背景をよく理解して関わる。11. 患者の気持ちを理解しようと親身になって話をきく。12. 患者が努力していることを認める。13. 患者の気持ちを受け止め寄り添う。14. 病気や治療についてわかりやすく説明する。15. 診察に同席し医師との会話を助ける。16. 相談内容に応じて相談窓口を紹介する。17. 病気を抱えながらうまく生活する方法について助言する。18. 問題解決方法を一緒に考える。19. 患者の問題解決に責任をもって行動する。20. 患者が自宅で困ったときは電話相談に応じる。21. 患者を励ます。22. 採血や点滴では確かな技術をもって対応する。

これらの 22 のカテゴリを形成する、関わりの具体的内容 67 項目と片岡らの研究⁴⁾で明らかになった、外来通院がん患者のエンパワ-メントを促進する看護援助 20 項目から、重複内容の整理及び文言の精選を経て 57 項目からなる無記名調査票を作成した。

外来通院がん患者への質問紙調査

調査協力が同意が得られた患者会に所属する外来通院がん患者 945 名に調査票を配布し、そのうち 405 名 (42.9%) から回答を得た。有効回答数は 395 名 (97.5%) であった。395 名の内訳は男性 90 名 (22.8%)、女性 305 名 (77.2%) であり、年齢は 50 歳代 115 名 (29.1%)、患者の病名は乳がん 215 名 (26.2%)、がん罹患から現在までの期間は 2 年以上 322 名 (81.5%) がそれぞれ最多であった。外来通院の頻度は、3 か月に 1 回が 94 名 (23.8%) と最多であった。探索的因子分析の結果、外

来通院がん患者が自分らしく生活するために外来看護師に求める看護実践能力として、「療養上の問題への対処をとともに考える」「看護専門職者としての態度・知識・技術で関わる」「関心・気遣いに基づくコミュニケーションを図る」「治療や副作用をわかりやすく説明する」「個としての患者をよく知っている」の 5 因子が抽出された。また、各因子において、患者が考える重要度の因子得点と実際に看護師からうける程度の因子得点を比較した結果、いずれの因子も前者が後者よりも有意に高かった。

(2) 外来通院がん患者の主体性を活かす外来看護実践に必要な外来看護師の能力の明確化：外来看護師の視点からの調査

調査票の開発

文献検索の結果、64 文献が選択された。これらの文献から抽出された外来看護実践方法と、上記(1)で用いた調査票の 57 項目のうち、因子負荷量が 0.35 未満で、患者が重要と考える程度が低い 3 項目を削除した 54 項目から、重複内容の整理及び文言の精選を経て 86 項目からなる無記名調査票を作成した。

外来看護師への質問紙調査

調査協力が同意が得られたがん診療連携拠点病院に所属する外来看護師 1130 名に調査票を配布し、761 名 (67.3%) から回答を得た。有効回答数は 598 名 (78.5%) であった。探索的因子分析の結果、外来通院がん患者が自分らしく生活するために外来看護師が重要と考える看護実践能力として、「問題解決方法の獲得への支援と療養姿勢の後押し」「患者の考えや思いの引き出しとあるがままの理解」「他職種連携による支援」「外来診察における医師からの情報獲得支援」「起こりうる副作用と自宅での対処方法についての説明」の 5 因子が抽出された。また、患者が重要と考える外来看護師の関わりとその関わりについての外来看護師の実施度には

有意な差があり、いずれの因子も患者が重要と考える程度に外来看護師は実施をしていないことが明らかになった。

(3) 育成プログラムの開発

上記(1)(2)の結果より、外来通院するがん患者の主体性を活かして外来看護を実践することができる外来看護師を育成するプログラムを以下のように開発した。

プログラムの目的：外来通院がん患者が主体性を発揮して問題解決に取り組み自分らしく日常生活を送ることを支援することができる外来看護師を育成することを目的とする。

プログラムにおける学習者：自分の所属する部署で外来看護がひととおり実践できる者で、外来勤務2年目程度の看護師。

外来通院がん患者が主体性を発揮して問題解決に取り組み自分らしく日常生活を送ることを支援するために獲得する必要がある外来看護実践能力：以下の5つである。「療養上の問題に対する患者の考えや思いの把握とありのままの理解」「問題解決方法の獲得への支援と療養姿勢の後押し」「がん治療に伴って起こりうる副作用と自宅での対処方法についての説明」「外来診察における医師からの情報獲得支援」「外来における他職種連携による支援」。

プログラムの構成と活用方法：上記の5つの実践能力を育成するために、実践能力ごとにサブプログラム作成する。即ち本プログラムは5つのサブプログラムから構成される。プログラムは、外来看護師が、自分の実践力向上に向けて必要な内容を効率よく学習できるようモジュール方式とする。まず「実践力チェックリスト」を活用することにより、外来通院がん患者の主体性発揮を活用する外来看護実践における、自己の実践能力の状態を評価する。そして評価結果に基づき、学習するサブプログラムを選定し学習を行

い。学習後は再度「実践力チェックリスト」を活用して学習の成果を評価する。サブプログラムの学習方法は、学習内容によって、講義、ロールプレイ、事例検討、グループ討議、所属外来における実習と指導者との実践の振り返り、等であり、指導は、外来師長、がん看護専門看護師、がん看護関連の認定看護師等である。以下に、サブプログラムごとの学習目標と小目標を示す。

サブプログラム1：学習目標；療養上の問題に対する患者の考えや思いの把握とありのままの理解。小目標；患者の考えや思いを把握し、理解していることを患者に伝える方法を理解できる。関わる必要性のある患者を見出す方法を理解できる。所属外来に通院する患者に対して、患者の考えや思いを把握し、理解していることを患者に伝えることができる。

サブプログラム2：学習目標；療養上の問題を解決するための方法を患者が獲得できるように支援し、問題解決に取り組んでいこうとする意欲を高めることができる。小目標；外来通院するがん患者における療養生活上の問題とその対処方法を理解できる。外来通院がん患者が問題解決方法を獲得すること支援する方法及び問題解決に取り組んでいこうとする意欲を高める方法を理解できる。所属外来に通院するがん患者に対して、問題解決方法の獲得を支援し、問題解決に取り組んでいこうとする意欲を高めることができる。

サブプログラム3：学習目標；がん治療に伴って生じる副作用と自宅での対処方法を患者の個別性に配慮してわかりやすく説明できる。小目標；外来でのセルフケア支援方法を理解できる。患者の個別性に配慮したわかりやすい説明とは何かについて理解できる。所属外来に通院する患者に対して、がん治療に伴う副作用と自宅での対処方法を患者の個別性に配慮してわかりやすく説明できる。

サブプログラム4：学習目標；外来診察において患者が医師から必要な情報を得ることを支援することができる。小目標；外来診察における患者の情報獲得ニーズを理解できる。外来診察において患者が医師から情報を得ることを支援する方法を理解できる。所属する外来に通院する患者に対して、外来診察において医師から情報を得ることを支援できる。

サブプログラム5：学習目標；他職種と連携して外来通院するがん患者の問題解決を継続的に支援できる。小目標；他職種と連携するための知識や方法を理解できる。所属する外来において、患者の問題解決のために他職種と連携することができる。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

佐藤まゆみ，佐藤禮子，片岡純，森本悦子，高山京子，阿部恭子，広瀬由美子，大内美穂子：外来通院がん患者と家族が自分らしく生活するために求める外来看護師の関わり．千葉県立保健医療大学紀要，4(1)，33-40，2013．(査読有)

〔学会発表〕(計2件)

Mayumi Sato，Reiko Sato，Jun Kataoka，Etsuko Morimoto，Kyoko Takayama，Kyoko Abe，Yumiko Hirose，Mihoko Kawasaki：Relationship with clinic nurses demanded by cancer patients and their families in order to live the way they want while having cancer．17th International Conference on Cancer Nursing，2012年9月12日，Prague(Czech Republic)．

片岡純，佐藤まゆみ，阿部恭子，広瀬由美子，大内美穂子，森本悦子，高山京子，佐藤禮子：外来通院がん患者が主体性を発揮して行動するために外来看護師に求める看護実践能力．第27回日本がん看護学会学術集会，2013年2月17日，金沢市．

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

6．研究組織

(1)研究代表者

佐藤 まゆみ (SATO, Mayumi)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・教授
研究者番号：10251191

(2)研究分担者

佐藤 禮子 (SATO, Reiko)
関西国際大学・保健医療学部・教授
研究者番号：90132240

片岡 純 (KATAOKA, Jun)
愛知県立大学・看護学部・教授
研究者番号：70259307

森本 悦子 (MORIMOTO, Etsuko)
関東学院大学・看護学部・准教授
研究者番号：60305670

阿部 恭子 (ABE, Kyoko)
千葉大学大学院・看護学研究科・准教授
研究者番号：00400820

広瀬由美子 (Hirose Yumiko)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教
研究者番号：20555297

大内美穂子 (OUCHI, Mihoko)
千葉県立保健医療大学・健康科学部・助教
研究者番号：30614507

研究協力者

高山 京子 (TAKAYAMA, Kyoko)
聖隷クリストファー大学大学院